

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名	田中裕成
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第110号
学位授与の日付	2021(令和3年)年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条
学 位 論 文 題 目	俱舍論修行体系の特異性
論 文 審 査 委 員	主査 松田 和信（佛教大学教授） 副査 本庄 良文（佛教大学教授） 副査 小谷信千代（大谷大学名誉教授）

〔1〕論文の概要

田中裕成氏の学位請求論文は、インドの伝統的仏教教団を代表する説一切有部によって構築された修行体系と世親（5世紀）の『俱舍論』に見られる修行体系の比較分析である。従来、説一切有部の修行体系を説明する際には『俱舍論』に説かれる修行体系を用いることが多かったが、『俱舍論』が説一切有部の修行体系を祖述しているかどうかは古くから議論され、近年の先行研究の多くでも説一切有部の正統派論書との相違点が指摘されている。しかし、相違する理由までは検討されてこなかった。本論文では、修行体系について『俱舍論』と説一切有部論書の比較検討を行い、『俱舍論』の修行体系を説一切有部の正統説とみなすことができないことを指摘して、有部の修行体系における『俱舍論』の特異性を明らかにする。本論文の内容構成と各章の概要は以下の通りである。

第一章 有部系論書における煖と頂と信の関係

第一節 問題の所在

第二節 『発智論』の煖・頂

第三節 『甘露味論』における煖・頂

第四節 『雜心論』における煖・頂

第五節 『順正理論』における煖・頂

第六節 『ディーパー』における煖・頂

第二章 『発智論』と『婆沙論』における三義観七処善

第一節 問題の所在

第二節 三義観と七処善について

第三節 『発智論』における三義観七処善の有漏無漏分別

第四節 『婆沙論』における三義観七処善の位置付け

第三章 有部系論書における四念住説の位置付け

第一節 はじめに

第二節 『俱舎論』の四念住説とその問題点

第三節 四顛倒の対治を説く四念住説

第四節 諸法の分析を説く四念住説―『心論経』や『俱舎論』等―

第四章 俱舎論修行体系における三義観七処善

第一節 問題の所在

第二節 『俱舎論』の記述形式

第三節 『俱舎論』の非伝説句に対する『順正理論』の立場

第四節 『俱舎論』注釈書の見解

第五章 新出梵文俱舎頌と諸俱舎頌の関係

第一節 問題の所在

第二節 新出俱舎論頌写本（ポタラ宮俱舎頌）について

第三節 『俱舎頌』改変の意図

第四節 世親形色批判に反論する『顕宗論』対応の五偈

第五節 世親の三世実有説批判に反論する未詳の三偈

第六節 毘婆沙師の顔を立てた『ポタラ宮俱舎頌』と『真諦俱舎頌』

〔第一章〕先行研究の指摘を受け、四善根位の煖・頂において『俱舎論』では「信」が説かれない理由を探り、有部系論書の煖・頂の説明における信の記述を分析する。その結果、いずれも『発智論』を起源とすることが明らかとなる。さらに、信の記述を組み込む諸論書を、二種の系統、すなわち『発智論』が引用する経典（教証）を重視する系統（甘露味論、雑心論の第一説）と、『発智論』という論書自体の記述を重視する系統（雑心論の有説、順正理論、アビダルマ・ディーパ）とに分類する。この検討結果を踏まえた上で、『俱舎論』が『雑心論』を種本とした文献であることを加味すれば、『雑心論』で採用されていた信の記述が『俱舎論』で採用されていない背景に、世親による何らかの恣意性を見出すことができる。

〔第二章〕先行研究が指摘する『俱舎論』を始めとする心論系論書において、修行徳目の「三義観七処善」が説かれない理由を追求し、『発智論』と『婆沙論』における三義観七処善の記述を検討する。その結果、『婆沙論』において『発智論』が引用する経典『七処善三義観経』に準拠して七処善を無漏とみなす立場と、『発智論』の解釈に従って有漏にも通ずるとみなす二つの立場が存在したことを明らかにする。つまり『新婆沙論』や『順正理論』は、『発智論』の解釈を重視する立場に立ち、三義観七処善を有漏の修行として受容した。一方、心論系論書が三義観七処善を採用しなかったのは、『発智論』が引用する『七処善三義観経』に基づく立場に立ち、三義観七処善を無漏の修行として受容したことに基づくからであり、この分析結果から、『旧婆沙論』に比べて、『新婆沙論』では毘婆沙師（説一切有部正統派）の宗義に合致するように議論が整備されていた傾向も確認することができる。

〔第三章〕第二章の検討を受け、説一切有部の修行体系が三義観七処善を採用した理由を明らかにするために、有部論書において四念住を説く目的を分析する。『俱舍論』の四念住説では四顛倒の対治としての四念住の性質が希薄である点が確認でき、有部系論書における四念住と四顛倒の関係を見ると、四念住の中の別相念住の目的を巡って、「四顛倒の対治→苦の観察」という構造を持つ古い論書（心論、甘露味論）と、「諸法の分析（別相念住）→苦の観察（総相念住）」という構造を持つ新しい論書（心論経、雑心論、俱舍論、順正理論）とで差異があることが見て取れる。これによって、本来は四顛倒の対治を目的としていた四念住が、やがて諸法の分析的傾向が高まって自性の観察へと変化し、『俱舍論』等のように、四念住における四顛倒の対治としての性質が形骸化していった可能性を指摘する。説一切有部が三義観七処善を修行徳目として採用した目的は、四念住における身受心法からなる諸法の分析を、有部の法体系で用いる蘊処界の諸法の分析に置換えることで、より諸法の分析に力点をおいた修行体系へと整備した可能性を指摘する。さらに三義観七処善を採用することによって、四念住で扱う諦を苦諦だけから四諦すべてに増やし、後の四諦観察への移行を円滑にすることを目的としていた可能性を指摘する。この分析結果に基づくと、古い有部論書と同一の特徴が見られることから『サウンダラナンダ』と『坐禅三昧経』が古い修行体系を伝えている可能性を指摘する。

〔第四章〕引き続き、三義観七処善が『俱舍論』で説かれない理由を探り、俱舍論注釈書類の記述を検討する。その結果、ヤショーミトラ疏以外の諸注釈では、いずれも四念住において三義観七処善を補っていることが明らかとなる。このことから、『俱舍論』の記述において「伝説」の語が付加されていない箇所でも、有部の正統派にとって不適切な記述を含む可能性があることを指摘する。一方、自身の立場を経部とするヤショーミトラ疏のみが三義観七処善に言及しない。この点から、三義観七処善を説かない立場は経部としては容認される可能性があることを指摘する。第二章の検討に基づけば、経典では無漏と説かれていた三義観七処善は、『発智論』では有漏と読み替えられて修行体系に組み込まれた。これは、経ではなく論に基づく解釈である。このことから、『俱舍論』では「伝説」の語がなくても、『発智論』起源の記述について説明しないという消極的方法を用いて、世親自身の経部的立場を表しているということが出来る。これは、第一章で検討した煖・頂における信の記述を『俱舍論』が採用しない点についても、その源泉が『発智論』であることで呼応する。また、この視点から分析すると、ヤショーミトラ疏以外の諸注釈の立場も自ずと明らかになる。

〔第五章〕「伝説」の語がなくても『俱舍論』が説一切有部の正統派にとって同意できない内容を含むことを前章で明らかにしたが、世親は第八章定品末尾の偈で「概ねカシュミール毘婆沙師のアビダルマを私は説いた」と述べ、自らの立場を正統派のカシュミール毘婆沙師とする。この偈の意味を明らかにするために、新出のポタラ宮蔵梵文俱舍論頌写本を分析する。衆賢の『順正理論』や『顕宗論』は、偈の「概ね」の語は『俱舍論』に無表や三世等について不適切な記述があることを意味するという。従って『顕宗論』では無表を説く第4章3偈を改変

し、三世を説く第5章27偈を削除する。新出写本ではこの両方を改変する。真諦訳『俱舍論』でも当該の偈頌は改変される。これらの点から『俱舍論頌』そのものは「伝説」の語の有無に関わらず、有部正統派にとって不適切な箇所が存在し、新出写本や真諦訳はカシュミール毘婆沙師の正統説を保つべく改変を行った可能性が高い。従って、『俱舍論』を無批判に有部正統派説を祖述した文献であるとみなすことにはできない。さらに、真諦訳の異読は漢訳に際して行われた真諦独自のものではなく、インドに源泉があることも明らかである。

〔2〕 審査結果の要旨

『俱舍論』に説かれる教理は、その第八章定品末尾に著者の世親自身が述べるように、「概ね」説一切有部のカシュミール正統派の宗義に基づくものとされてきた。そのゆえにこそ、仏教を学び研究するための基礎学の格好の資料として、インド、中国、チベット、および我が国を含む「北伝仏教世界」の中で『俱舍論』は長らく珍重されてきた。また『俱舍論』の中に示される有部正統派宗義の基本線を外れると思われる教義については、世親が「伝説（＝カシュミール有部はそうに伝えるが私はそうは思わない）」の語を交えて、有部宗義に対して冷淡な態度を示す箇所と、カシュミールの説一切有部正統派を自認する衆賢に『順正理論』の中で厳しく批判される箇所に限られるかのように考えられてきた。田中裕成氏の論文はそのような従来の俱舍論観に再考を迫る画期的な内容となっている。すなわち、田中氏は、有部の修行道体系に分析の焦点をあて、『発智論』から『俱舍論』注釈書類に至る膨大な資料を精査して相互の関係を整理し、『俱舍論』の中に、カシュミール正統有部とは異なる叙述があることを見出した上で、説一切有部の諸論書の中に、『俱舍論』の立場と、衆賢に代表されるカシュミール正統有部説の立場との大きく二つに分けられる流れのあることを四章に亘って論証し、もって『俱舍論』の修行道体系の特異性を浮かび上がらせている。なお最終第五章は附論とも言うべきもので、必ずしも有部の修行道体系に直接関連はしないが、『俱舍論』の骨格をなす「俱舍論頌」の新しい梵文資料が、『俱舍論』の記述の中の、「正統」「非正統」を論じるに当たって大きな示唆を与えることを世界で初めて指摘したものである。なお、田中氏は『俱舍論』第六章に該当する有部の修行道階梯の研究を主要課題として既に多くの研究成果を挙げているが、本学位請求論文の下地になった論稿はそのうちの三、四割程度に過ぎない。このことは氏の問題発見および解決能力の非凡さを物語っている。

本論文は五章から構成されているが、詳しく見ると、第一章では、煖と頂とにおける信の修習に関する諸論書における記述が『発智論』を起原とすること、それには『発智論』所引の経を重視する系統と、論を重視する系統の二種あることが明らかにされる。『俱舍論』はこれら二系統の説を含む『雑心論』を参照している可能性が極めて高いにもかかわらず、その信の記述を採用していないことに著者は「なんらかの恣意性があったことが窺える」と言う。ここに『俱舍論』の記述を無批判に説一切有部の正統説とみなすことに危険性があるとする興味深い

見解が示されている。第二章では、三義観と七処善が修行徳目として説示される系統とされない系統のある理由が検討される。『発智論』は七処善三義観を有漏行に割り当ててゐるが、『俱舍論』は有漏行の修行段階に七処善三義観を割り当てない。『俱舍論』が有漏行の修行段階にそれを割り当てないのは、『俱舍論』が『発智論』の七処善三義観を有漏行に割り当ててゐる記述を恣意的に排除したことによるからだと言う。これも今後『俱舍論』の特異性を考える上で重要な提案である。第三章では、諸論書における四念住とその所対治である四顛倒との関係が分析され、七処善三義観が四念住の後に位置づけられた理由が追求される。著者はその理由を、四念住の後に七処善三義観を導入することには、それによって有部の四念住の体系をさらに諸法の分析的体系に展開させ、その上で、続く四善根位における四諦観察との関係を密接にすることが意図されていると言う。さらにこの修行体系には、有部の古い体質が保たれている可能性が見出せると言う。この見解は、先行研究においては明らかになっていない有部本来の四念住の修行体系が如何なるものであるかを解明することに資するものとして高く評価される。第四章では、七処善三義観を採用しない『俱舍論』の立場とは如何なるものであるかが考察される。そのために、従来『俱舍論』がカシュミールの正統派の教義に異を唱えるときに用いる「伝説」の語が、七処善三義観に対する『俱舍論』の記述において用いられていない場合の問題点を紹介し、その問題点を『順正理論』や後代の注釈がどのように評価するかを検討して、『俱舍論』に「伝説」の語が用いられていない箇所でも『俱舍論』の説が有部正統派の『順正理論』の説とは異なることを指摘し、その異なる理由を経部的立場に立つ世親が『発智論』起原の記述を容認していないことに求める。これは論者に独自の観点であり、その考察の独創性も高く評価される。最終第五章では、新出梵文俱舍論頌の写本分析を通して、修行体系のみの特異性だけでなく、『俱舍論』という書そのものの特異性が明らかにされている。

以上のように、本論文は、修行道大系をめぐる世親の『俱舍論』と説一切有部の諸論書を比較分析して、多くの問題点を解決し、今後『俱舍論』という重要文献を見て行く上での新たな指針を提供する優れた論文であると評価できるが、問題点、あるいは今後のさらなる研究に向けて要望したい点も認められる。まず、本論文は、各章の検討は緻密であるが、やや簡潔に過ぎて論旨が把握しがたいという難点も認められる。説一切有部の修行道大系を知悉して、四善根、四念住、七処善三義観といった修行徳目の詳細を理解している研究者であれば本論文の論旨を追うことは困難ではないかもしれないが、そうではない研究者から見ると、論述の簡潔さは長所でもあるが、分かり難い点も散見され、もう少し読者を意識した親切な説明を論述の中に入れるべきであった。例えば、第一章第四節で『雑心論』では煖・頂の説明に「第一説」と「有説」との二種があるとするが、その第一説については議論の筋が把握し難い。そこでは『雑心論』と『発智論』と『新婆沙論』における煖に関する議論が続けて説明されるが、その説明が余りにも簡潔なために議論の筋を追うことが困難である。また、最終章の論述について、前四章との関連性が明白に述べられていないことも惜しまれる。さらに、漢文資料、チベット

語資料の提示に当っては可能な限り原サンスクリットを明記するか、あるいは原文が存在しない場合は原サンスクリットを想定して示すことが望ましいが、本論文では十分にそれがなされているとは言えない。また、一部、サンスクリット文からの翻訳に、注釈を十分参照していないがための不明確な部分も見受けられる。さらに、日本語表現について、全体的には簡潔を通していてもかかわらず、一部では内容的にも文言的にも重なる場合も見受けられる。

しかし、このような難点は本論の価値を減ずる程のものではない。本論文は、先行研究が遺り残した説一切有部の修行徳目が諸論書においてどのように発展していったかという過程の解明を文献学的研究の着実な手法を用いて明らかにし、所期の目的である「有部修行体系における『俱舎論』の修行体系の特異性を明らかにする」ことを十分に達成している。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。